溝上慎一の教育論（動画チャンネル） No270

（新著の紹介）

「主体的な学びの態度」を測定することで見えてくること

竹内謙彰先生（立命館大学名誉教授）

溝上　慎一　　Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

http://smizok.net/
E-mail　mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

＊詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
※公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています。
※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

No268 新著の紹介

主体的な学び
が成立するための条件の探求

竹内謙彰先生
（立命館大学名誉教授）

（ご紹介）

竹内 謙彰
たけうち よしあき

立命館大学名誉教授

京都府生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。京都大学博士（教育学）

愛知教育大学勤務を経て、立命館大学産業社会学部教授に。2024年3月末定年退職
専門は、発達心理学、教育心理学。

（主な著書）
・ハヴァースカ,K.他(著), 竹内謙彰・荒木穂積(監訳)(2010). 乳幼児期の自閉症スペクトラム障害―診断・アセスメント・療育 ― クリエイツかもがわ
・竹内謙彰(編著)(1998). 空間認知の発達・個人差・性差と環境要因 ― 風間書房

目次

文献：竹内謙彰（2024）『主体的な学びの探求』 クリエイツかもがわ.

- 背景と課題
- 主体的な学びとは何か
  - 文部科学省の提起とそれに対する批判的検討
  - 大学教育における主体的な学びに関わる近年の議論
- 主体的な学びが成立していると考えられる事例から学ぶ
  - ワークショップ　／　サドベリー・バレー校
- まとめ
  - 主体的な学びとは何か
  - 主体的学びが実現するための条件

それではご覧ください

主体的な学びの態度についての調査研究

報告：竹内謙彰

目次

- 問題意識
- (1)主体的な学びの態度尺度の作成
- (2)成人期における主体的な学びの態度
  －年齢による変化ならびに人生満足度との関連－
- (3)主体的な学びの態度と子ども時代の遊び体験
- まとめ

問題意識

- 主体的な学びの簡潔な定義：学び手自身が自立的に意思決定を行い、自律的に自らの動機づけに則り、また自らの動機づけを意図的に方向づけながら、他者との協力関係を構築しつつ、社会との関係性をも視野に入れた学び
- 人間の生物学的本性に根差した遊びを通じた学びの重要性 (Gray, 2009; 2011; 2013)。
- 制度的な教育システムと人間が本来的に持つ学びの傾向との間には、一般的に言って、何らかの齟齬あるいは矛盾が存在するのではないか。
- ここでは、学校のような教育システムを離れても持続しうる学びの態度に着目する。

(1)主体的な学びの態度尺度の作成

- ここでは、学校のような教育システムを離れても持続しうる学びの態度に着目する。そうすると、その重要な構成要素として、学びにおける積極性・能動性と自主的な判断に基づく自律性、ならびに他者との関係性が重要になってくるのではないか。実際の尺度項目構成では、Gray (2013)およびGreenberg (1994)の記述を参考とした。
- 併存的妥当性の検討：(1)浅野(2002)の作成した、学びの積極的関与尺度と継続意志尺度、(2)西川・雨宮(2015)が作成した「知的好奇心尺度」（下位尺度：拡散的好奇心と特殊的好奇心）

(1)主体的な学びの態度尺度の作成 ～目的と方法～

［調査１］

- 目的：主体的学びの態度尺度の因子構成を確認するとともに、「積極的関与」尺度と「継続意志」尺度との関連から主体的学びの態度尺度の併存的妥当性を検討することであった。
- 方法：Gray (2013)およびGreenberg (1994)の記述を参考に13項目からなる主体的な学びの態度についての質問文を構成した。また、「積極的関与」尺度と「継続意志」尺度を用いた。
- 調査対象者は、C社のネットリサーチ・データベースに登録されたモニターから全国の大学生1～3年生を対象として調査を実施し、不適切な回答を行っていると判断したものを除外した結果、184名（有効回答率：61.5%）が分析対象となった。

(1)主体的な学びの態度尺度の作成
～目的と方法～

［調査２］

- 目的：知的好奇心尺度との関連から併存的妥当性を検討することであった。
- 方法：調査１で構成した「主体的な学びの態度」の質問文と「知的好奇心尺度」を用いた。
- 調査対象者は、調査１に参加したものを対象にして、138名から有効回答を得た。

(1)主体的な学びの態度尺度の作成～結果と考察～

Table 1 主体的学び態度尺度の因子分析（最尤法、プロマックス回転後）の負荷量と各項目の平均値・標準偏差〔調査1〕(n=184)

No.	項目内容	因子1	因子2	因子3	*M*	*SD*
10	何かを自発的に学ぶことは楽しいことだ	.81	.00	−.17	4.12	0.77
11	自分が本当に興味あることなら、どれほど難しくても挑戦する価値があると思う	.75	−.02	.10	4.05	0.83
4	好きなことを自由に学ぶことはすべての人にとって、重要な権利だと思う	.68	−.18	−.05	4.35	0.78
6	興味がわいてきて調べているうちに夢中になって、時間が経つのを忘れてしまうことがある	.41	.24	−.13	3.81	1.00
5	自分が努力して学んだことを社会の役に立てたいと思う	.33	.16	.18	3.89	0.98
9	人が何をどのように学ぶかは、本人が責任を持って選ばなければならない	.31	.16	.24	3.32	0.86
8	自分が学んでいることを人にわかりやすく説明できる	−.12	.86	−.12	2.98	1.05
7	学びたいことでわからないことが出てきたら、知っていそうな人に積極的に質問する	.08	.62	.04	3.31	1.01
12	たいていのことは、誰かに教えてもらわなければ身につかない	−.05	.08	.62	3.22	1.04
3	授業などの枠組みがなくなると、自分から学ぼうとはしなくなってしまうだろう	−.06	−.19	.42	3.54	0.97

注.項目得点は、記述が自分によくあてはまっているほど高くなるように得点化した。

自発的学び

対人的学び

教えられる学び

(1)主体的な学びの態度尺度の作成～結果と考察～

Table 2 主体的学び態度尺度の下位尺度と積極的関与・継続意志各尺度間の相関係数ならびに各尺度の平均値、標準偏差とα係数〔調査1〕　(n=184)

	対人的学び	教えられる学び	積極的関与	継続意志	*M*	*SD*	*α*
自発的学び	.30**	.10	.24**	.43**	3.98	0.57	.78
対人的学び	―	.07	.49**	.19**	3.15	0.89	.66
教えられる学び		―	-.08	-.03	3.38	0.77	.32
積極的関与			―	.42**	2.54	0.73	.80
継続意志				―	2.76	0.70	.82

**: $p < .01$

Table 3 主体的学び態度尺度と積極的関与・継続意志との偏相関係数〔調査1〕　(n=184)

	自発的な学び	対人的な学び
積極的関与	.11	.45**
継続意志	.40**	.07

注）自発的学びについては対人的学びを、対人的学びには自発的学びをそれぞれ制御変数として偏相関係数を求めた。

**: $p < .01$

(1)主体的な学びの態度尺度の作成～結果と考察～

Table 4 主体的学び態度と知的好奇心の各下位尺度の偏相関係数〔調査2〕　(n=138)

	自発的な学び	対人的な学び
拡散的好奇心	.36**	.49**
特殊的好奇心	.43**	.29**

注）自発的学びについては対話的学びを、対話的学びには自発的学びをそれぞれ制御変数として偏相関係数を求めた。

**: $p < .01$

(1)主体的な学びの態度尺度の作成～まとめ～

- 主体的な学びの態度尺度の併存的妥当性：自発的学びと対人的学びは、積極的関与・継続意志尺度、ならびに知的好奇心尺度との間に比較的強いと言ってよい正の有意な相関が得られた。それに対し、教えられる学びは、積極的関与・継続意志尺度とは有意な相関がなく、知的好奇心尺度とは、下位尺度である拡散的好奇心との間にのみ、あまり強いとは言えない有意な負の相関が得られた。教えられる学びについての内的整合性ならびに併存的妥当性の分析から、主体的学び態度尺度を構成する下位尺度にはふさわしくないものと考えられる。よって、今後行う成人期調査では、教えられる学びを構成する2項目を除外して主体的学び態度尺度を構成することとした。

(2)成人期における主体的な学びの態度
第1調査：年齢との関係

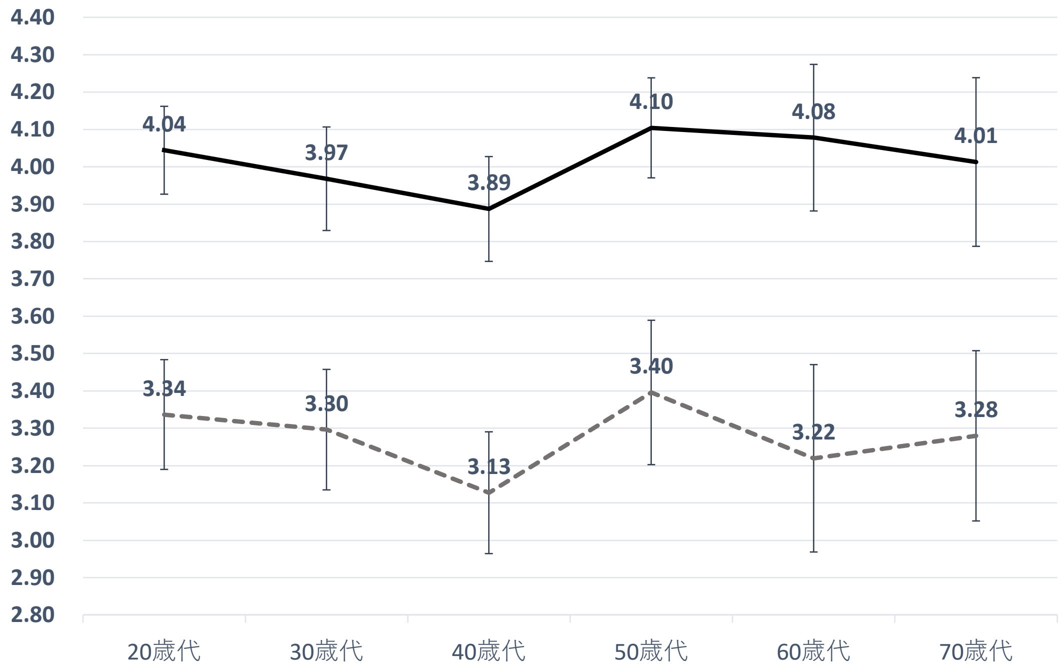

Figure 1-1　主体的学びの年代別平均得点と95%信頼区間(女性)

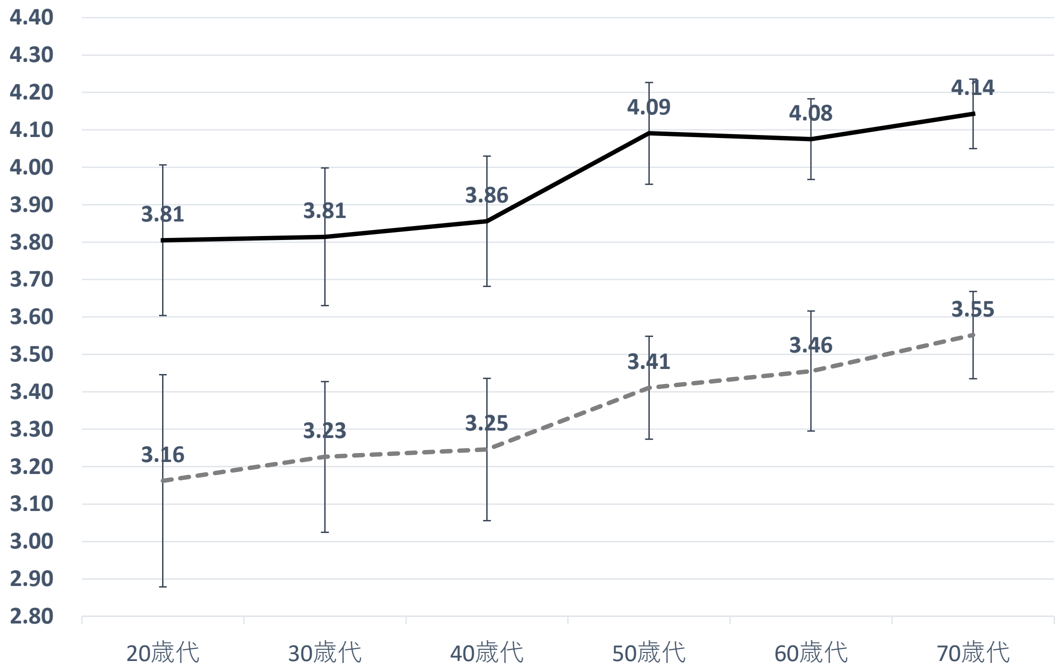

Figure 1-2　主体的学びの年代別平均得点と95%信頼区間(男性)

(2)成人期における主体的な学びの態度
第1調査：年齢との関係

男女別の1要因分散分析。男性でのみ年代による有意な差がみられた。

［自発的学び態度］

女性：n = 376, $F(5, 370) = 1.14$, n.s.

男性：n = 462, $F(5, 456) = 4.66$, $p < .001$

男性で、年代間に有意差がみられたので、多重比較（Bonferroniの法、5%水準）を行ったところ、以下の2群間で差が認められた。

70歳代 ＞ 20歳代

70歳代 ＞ 30歳代

70歳代 ＞ 40歳代

［対人的学び態度］

女性：n = 376, $F(5, 370) = 1.12$, n.s.

男性：n = 462, $F(5, 456) = 3.15$, $p < .01$

男性で、やはり年代間に有意差がみられたので、多重比較（Bonferroniの法、5%水準）を行ったが、いずれの2群間でも有意な差はみられなかった。

(2)成人期における主体的な学びの態度 第２調査：主観的幸福感(人生満足度)との関係

Table 5 男女別の各年代における変数間の相関係数

20歳代の女性（n = 55） / 20歳代の男性（n = 50）	自発的学び	対人的学び
人生満足度	**.12 / -.21**	**.32**/ .29***
自発的学び		.29* / .26

40歳代の女性（n = 54） / 40歳代の男性（n = 58）	自発的学び	対人的学び
人生満足度	**-.02 / .09**	**.34* / .57****
自発的学び		.39** / .33*

60歳代の女性（n = 63） / 60歳代の男性（n = 54）	自発的学び	対人的学び
人生満足度	**.25 / .13**	**.42** / .37****
自発的学び		.55** / .46**

* $p < .05$ ** $p < .01$

人生満足度は、20歳代、40歳代、60歳代のいずれの年齢群においても、男女を問わず、対人的学びとは有意な相関がみられたが、自発的学びとの間には、どの年代においても有意な相関は見られなかった。

(2)成人期における主体的な学びの態度まとめ

- 主体的な学び態度の得点の年齢的変化が男女で異なっていた（第1調査）。男性では、年齢が高くなるほど「自発的学び」も「対人的学び」もともに得点が高くなる傾向がみられたが、女性では年齢との間に一貫した傾向は見られなかった。男女で異なる結果が得られた理由はわからないが、時間的・精神的余裕が関連しているのではないかと考察された。
- 主観的幸福感（人生満足度）は、20歳代、40歳代、60歳代のいずれにおいても、男女ともに、「対人的学び」とのみ有意な相関がみられたが、「自発的学び」との相関はいずれも有意ではなかった。「対人的学び」の要素に含まれると考えられる他者との肯定的な関係性が、主観的幸福感と関連するのではないかと考察された。

(3)主体的な学びの態度と子ども時代の遊び体験

- 背景にある理論的な仮説：人間は生物学的基礎からして本来的に遊びを通じて主体的に学ぶ傾向を持っている。
- 作業仮説：児童期における遊び体験は、主体的な学びの態度の形成に寄与するであろう。
- この調査研究では、20～30歳代の成人に小学生時代の遊び体験を質問紙（木下・森・大西, 2017）で尋ね、その得点と主体的な学びの態度の下位尺度得点との関連を検討した。どのような遊びカテゴリーが関連するかにも着目した。

(3)主体的な学びの態度と子ども時代の遊び体験
重回帰分析結果

Table 6 自発的学びを従属変数とする重回帰分析の
標準偏回帰係数

	女性(n=546)	男性(n=537)
ゲーム遊び	-.07	.02
遊びの自由と仲間	.19 ***	.11 *
従来遊び	.13 **	.17 **
遊びの鎮静	.07	.17 ***
遊びの興奮	.05	.03
Adjusted R^2	.08	.14

***p<.001　**p<.01　*p<.05

Table 7 対人的学びを従属変数とする重回帰分析の
標準偏回帰係数

	女性(n=546)	男性(n=537)
ゲーム遊び	-.07	-.13 **
遊びの自由と仲間	.26 ***	.37 ***
従来遊び	-.02	-.01
遊びの鎮静	.08	.08
遊びの興奮	.08	.09 *
Adjusted R^2	.08	.15

***p<.001　**p<.01　*p<.05

(3)主体的な学びの態度と子ども時代の遊び体験　まとめ①

- １）遊び体験の下位尺度の中で、主体的な学び態度に最も寄与しているのは、「遊びの自由と仲間」。この下位尺度は「自分たちで作った遊びで遊ぶ」および「ルールを自由に変えて遊ぶ」という遊びの自由にかかわる項目と、「友達に相談する」という仲間に関わる項目、それに加えて「歌を歌う」と「絵を描く」という芸術的な活動にかかわる項目によって構成されている。この下位尺度の名まえを単に遊びの自由とするのではなく、それに仲間の語を加えて、遊びの自由と仲間としたのである。
- 仲間との関係の要素が含まれるがゆえに、この下位尺度は、男女ともに、対人的学びと最も関連が強い変数となったのであろう。とはいえ、遊びの自由と仲間は、男女ともに、自発的学びとも有意な関連を示しており、特に女性においては、遊び体験の中で最も自発的学びと関連が強い変数となっている。まとめるならば、遊びにおける自由と仲間への信頼とを共に含む遊び体験が、主体的学びの形成にとって重要だということが推察される。

(3)主体的な学びの態度と子ども時代の遊び体験 まとめ②

- ２）「従来遊び」は、男女ともに自発的学びとは有意な関連があったが、対人的な学びとの関連は有意ではなかった。遊具による遊びや鬼ごっこ、あるいは手遊びといった遊びでは、何らかの仲間関係を要素として含んでいることが多い。にもかかわらず対人的な学びと有意な関連がみられなかった。従来遊びにおいて求められる仲間関係と、対人的な学びにおいて求められる人との関係性とは質が異なるのかもしれない。
- ３）男性でのみ、「遊びの鎮静」が自発的学びと、また「遊びの興奮」が対人的学びと、それぞれ有意な関連を示した。ただし、遊びの興奮が有意な関連を示したといっても、かろうじて有意になったといったレベルであり、比較的明瞭な関連がみられたのは、前者の関係、すなわち男性における遊びの鎮静と自発的学びの間だけである。自発的に何かをなそうとするときには、少し冷静になって、事前に見通しをもつことが求められるだろう。遊びにおいてそうした状態がもたらされることが、自発的な学びの態度と関連しているのかもしれない。ただし、こうした関係性が女性にみられなかった理由はわからない。

まとめ

- ３つの調査研究の結果の概略：①主体的な学びの態度の両下位尺度は、学びのモチベーションや知的好奇心と比較的強い関連がみられる。②成人期（20～70歳代）においては年齢が高くなるほど高くなる傾向が男性でみられる。③対人的学びは主観的幸福感と関連している。④20～30歳代の若年成人においては、主体的な学びの態度の両下位尺度が、児童期の遊び体験のうち遊びの自由と仲間という要因と関連している。
- 今回得られた調査結果は、あくまで相関に基づくものであること、また発達的な傾向についてもあくまで横断研究によるものであることという点での限界がある。それでも、ある程度の信頼性と妥当性をもった質問紙によって測定された主体的な学びの態度が、成人期において年齢や主観的幸福感、また児童期における遊びの自由と仲間への信頼といった要因と関連していることなどが推察されたことには、意義があるといえるだろう。

文献

- 浅野志津子 (2002). 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程――放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から. 教育心理学研究, 50, 141-151.
- Gray, P. (2013). Free to LEARN: Why unleashing the instinct to PLAY will make our children happier, more self-reliant, and better students for life. Basic Books. （吉田新一郎(訳) (2018). 遊びが学びに欠かせないわけ－自立した学び手を育てる. 東京：築地書館.）
- Greenberg, D. (2006). Free at last. Sudbury Valley School. （大沼安史(訳) (2006) 世界一素敵な学校【改訂新版】サドベリー・バレー物語. 東京：緑風出版.）
- 木下雅博・森茂起・大西彩子 (2017). 遊び体験尺度の開発. 応用心理学研究, 43(1), 1-10.
- 西川一二・雨宮俊彦 (2015). 知的好奇心新尺度の作成――拡散的好奇心と特殊的好奇心――. 教育心理学研究, 63, 412-425.